

特集記事 とうほう地域総合研究所 定期講演会

“心の復興”に取り組み13年、次は— 日本フィルハーモニー交響楽団の新たな挑戦

〔講師〕 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団 理事長 平井 俊邦



日本フィルハーモニー交響楽団理事長の平井でございます。今日は由緒あるとうほう地域総合研究所定期講演会で講演の機会をいただき、誠に光栄であり心より感謝申し上げます。本日は「心の復興に取り組み13年、次は」という演題でお話をさせていただきます。まず、第1部では日本フィルハーモニー交響楽団（日本フィル）の歴史と楽団の特徴について、第2部では心の復興について、第3部では音楽の持つ力を次にどう伝えて行くかを考えていきたいと思っております。

第1部 日本フィルを概観する

1. 楽団創立

日本フィルは1956年文化放送の専属楽団として設立されました。当時、日本のクラシック音楽業界はドイツ・オーストリア系の音楽を中心に演奏されていました。創立指揮者の渡邊暁雄はその枠に捉われず、ヨーロッパからアメリカを含めた幅広いレパートリーと斬新な演奏スタイルで、音楽界に新風を吹き込みました。その伝統は今でも日本フィルの演奏に脈々と引き継がれています。

2. 苦難の歴史

このように誕生した日本フィルは一世を風靡しましたが、1972年に組合活動が活発になり、労使が対立し親会社からの活動資金が打ち切れ、楽団は分裂する事態になりました。12年間の法廷闘争の末、和解しましたが、1985年に新財団を発足させるまで大きな組織から支援はなく、市民とともに歩むオーケストラとして、市民の方々や組合からの支援に支えられた苦難の道りでした。その後も大きな支援組織を持たない自主運営のオーケストラ活動を続けざるを得ず、財政基盤は極めて脆弱なまま今日に至っています。総事業費14億円の内、実に70%程度を自らのチケット収入、出演料で賄っています。そのため、年間150回のオーケストラ公演、200回程度の室内楽公演を行わなければ賄うことができません。経営は不安定で楽団員の処遇も恵まれない状況です。一方、財政基盤の強いNHK交響楽団（N響）、東京都交響楽団（都響）、読売日本交響楽団（Y響）は10億円から17億円の公的またはそれに準ずる助成金を大スポンサーから得ており経営は総じて安定、楽団員の処遇も音楽業界の中で良好です。これに対して日本フィルが得られる公的助成金は1億円強です。こうした財政基盤の弱い状態で再出発した日本フィルは、バブル経済期に1ヶ月に亘る海外公演を行う等再生したかに見えましたが、2000年初頭にバブル経営は破綻し6億円という大赤字を出し債務超過額はピークで3億5千万円になりました。この債務超過を解消するまで東日本大震災を挟み10年かかりました。しかも、2013年11月末までに新公益法人に移行できなければ、財団は解散されるという法律がありました。ガバナンスと財政健全化が認定条件で、債務超過ではこの財政状況健全化が達成できない訳です。日本フィルは窮地に追い込まれましたが、多くの方々、企業のご支援のお陰でオーケストラ連盟正会員25団体の内、最後から2番目（ブービーと呼んでいます）でしたが何とか移行できました。ところが、

直近でコロナ禍です。大スポンサーが無く、自主ないし受託公演で収入を得ている日本フィルは、演奏会ができないと死んでしまいます。大きなダメージを受けました。当初4ヶ月間は全く活動ができず、その後も数々の規制を受け、通常と比べると4億円の損失が想定されました。その場合には、また債務超過に陥ります。しかし、数々のドラマがあり、結果は、個人の方々の寄付や国からの助成金に助けられ脱出しました。このように度重なる経営危機を乗り越え甦ることができました。音楽を愛し、日本フィルを愛してくださる多くの方々のご支援のおかげに他なりません。

3. “温かさ” “人に寄り添う” 遺伝子

このような歴史を持つ日本フィルは、人の心の温かさを実感する遺伝子を、楽団とその演奏家たちが持っています。楽団のコーポレートカラーに「温かさ」、「人に寄り添う」を掲げています。オーケストラ・コンサート、エデュケーション・プログラム、リージョナル・アクティビティを3本の活動の柱に立てています。そして、震災後、“被災地に音楽を”の活動を4本目の柱に掲げています。オーケストラが担う使命の第一は質の高い音楽芸術を社会に提供することです。知れば知るほど面白い、より深い知的探求心からされるクラシック音楽を皆様に届け提供することと考えております。

4. “芸術性の追求”に加え“社会からの要請”に答える

そしてもう一つ重要な使命は、近年非常に高まってきているオーケストラに対する社会からの要請に応えることです。日本フィルは、この二つの使命を果たすために、芸術性と社会性、その両方を兼ね備えた楽団としてトップの座を狙っています。皆様に聞きなれないオーケストラの社会性についてご理解を得るために、現在行っている我々の社会性活動のいくつかをご紹介します。一つめは「新しい豊かさを求めて」ということで、

特にダイバーシティの活動です。障がいのある人々と健常者が一緒に楽しむ音楽会や、がん患者さんに大きな希望を与える「がん患者さんが歌う春の第九」です。これは、患者さん、サバイバーの方（がん治療が終了した人）、お医者さん、看護師さん、そして家族の皆さんが6ヶ月間練習し、ドイツ語の歌詞を暗譜で歌います。それに耐えた人だけが演奏する訳ですが、終わった後は大変興奮する感激的な演奏会になります。それから一人親家庭を演奏会にお呼びしている他、小編成のアンサンブルで学校、病院施設に訪問しています。また、これから高齢化社会へ向けた活動として「60歳からの楽器教室」を行っています。二つめのカテゴリーは、「子供達の無限の力」、子供達をしっかりと育てていこうというものです。「夏休みファミリーコンサート」は三世代で聞いて感動を共有してもらおうコンサートで、首都圏で17公演、50年続けてきた活動です。また、「春休みオーケストラ体験」は0歳から参加できる数々の音楽ワークショップです。三つめのカテゴリーは「コミュニティ、地域を元気にする活動」です。その中でも、九州全県をオーケストラ公演で回る活動は10ヶ所の公演を地元のボランティアと共同で作ります。そして、「東北の夢プロジェクト」です。こういう社会性の活動を数々行っており、我々は

「あらゆる人々に、あらゆる世代に、あらゆる地域に、そして世界へ」を標語にしています。

第2部 心の復興

【被災地に音楽を】

1. 人々の祈り・思い

心の復興、この活動がどのようなものであるか、これを映像と写真を交え、お伝えしたいと思います。この記録は13年間続けてきました「被災地へ音楽を」の活動です。実践の記録として、時間の経過とともに変化するコミュニティ、その中の音楽家たちの活動と思い、そして人々が感じたこと等を映像と写真を交えながら追いかけていきます。

2011年3月11日に東日本大震災が発生しました。東北地方は大変な惨事に遭遇しました。東京もこれ迄にない大きな揺れを経験しました。日本フィルはサントリーホールで、当日の夜と翌日の昼も東京定期演奏会を予定していました。そして、4日後に香港アートフェスティバルに参加するため出国する予定でした。ゲネプロ（注1）の44分前に震災に遭遇しましたが、関係者全員と建物の安全が確保でき、しっかりした音楽が提供できるようであれば、お客様が一人でもお出でになったな



3.11サントリーホール

注1 「ゲネプロ」：コンサートなどの舞台芸術において本番と同じ条件で行われる最終的なリハーサル

ら開催しようと決断しました。その結果、当日の夜は77名の方が、そして翌日の昼は（これは本当に驚いたのですが）758名の方々がお出でになりました。未曾有の大災害、テレビで昼夜その惨状が報道され、私は今でも大船渡の津波の情景が浮かんでまいります。「あまりにもひどい、自分はどうしたら良いのか、何かできることは無いのか」、そのような思いを多くの方々を抱きながら演奏会にお出でになったようでした。指揮者、ソリスト、演奏家、聴衆が一体となって祈りを捧げ、その想いを込めた音楽がホール全体を包みました。

2. 「音楽家に何が出来るか」を問い続け

10日後の香港アートフェスティバル終了までの厳しい環境での音楽活動は、楽団員にとって大災害に対する人々の思いをしっかり受け止める機会になりました。“音楽家に何が出来るか”を自らに問いながら、被災された方々に「人々の思い」を「音楽」という形でお届けしようと決めたのです。債務超過の財務状況でしたが、被災地支援は楽団の使命であるとし、「皆様の心を音楽に変えて日本フィルがお届けします」と4月より社会に訴えました。9月末までに650万円の寄付金が寄せられ、これを原資に半年で42公演延べ114名の楽員、スタッフが被災地を訪れました。その後国

の助成や多くの個人、法人の皆様の温かい支援も頂きながら、被災地の音楽活動は今日迄続けられ、現在では352回となっています。

・避難所生活に音楽を届ける

震災直後の半年は、避難所で生活する人々に音楽を届ける事が中心でした。4月6日、福島第一原発から10キロの太平洋に面する浪江町の方々が身を寄せていた二本松市の避難所に香港の企業から託された乾電池を届ける目的でした。併せて可能なら演奏をと、トロンボーン、ヴァイオリン、ヴィオラ奏者の3名がボランティアで訪問しました。これが「被災地に音楽を」活動のスタートです。当日の心境をヴィオラ奏者の後藤悠仁は次のように述べています。「あれほど演奏するのが怖い気持ちは初めてでした。良く晴れた青空とは反対に、こんな時に音楽をして本当に良いのだろうか、正直、音を出すこと自体が罪に感じられるほど、避難所はあまりにも静かだ。演奏後に80歳ほどのおじいさんが、音楽を聴いてこんなに涙し、こんな思いをしたのは生まれて初めてだと声をかけてくださいました。この方がどういう心境で音楽を聴いてくださったのか、音楽がなかった方がかえって良かったのだろうかと考えて複雑な心境になりました。音楽の無力さを感じました。」



二本松市（最初の被災地訪問）



埼玉県加須市（双葉町からの避難）

原発事故関連では浜通り地区の方が避難している避難所を訪問しました。津波関連では宮城県、福島県の沿岸部の方が避難している避難所や施設を訪問しました。

鎮魂の野外コンサートを名取、気仙沼、石巻で行いました。演奏者の松本克己はオウム真理教幹部らに殺害された坂本弁護士一家の墓前で毎年演奏している男です。彼は名取市の避難所で演奏中に感じたことを次のように述べています。

演奏中すごい雨、演奏を聞いていた息子さんを避難所で亡くしたお母さんが「この雷と雨は亡くなった方の喜びの涙だ、悲しみの涙ではなく感激の涙だ」と表現し、「こんな感動をありがとう」と言ってくれたことが本当に励みになりました。話し込むと被災後2ヶ月間、涙を流したことが無いという人が沢山いらっしゃいました。みんな色々な悲しみを持って耐えていて、音が聞こえたことによって心が開かれたようです。「2ヶ月分の涙を流して良かった」、「凄く気持ちが軽くなる」、「生きていて良かった」、「お父さん、私もう少しこっちで頑張るね」このような前向きな言葉を聞いて、それが音楽の力なのかなと思いました。

「被災地に音楽を」活動に一番求められていたのは住民の心のケアだったことが後日の調査で裏打ちされました。

・仮設住宅・災害復興住宅の生活に“音楽を届ける”
被災地では避難所から仮設住宅、災害復興住宅への入居、高台への転居等、被災地域住民の生活環境が時を追うごとに変化しました。避難している人々の生活も以前より落ち着きを取り戻してきました。演奏活動を受けやすくなったこともあり、学校はもとより、仮設住宅の集会所、地域の集会施設、病院、お寺、水族館、博物館、生協ホール等、活動拠点がぐっと広がりました。音楽で繋がり、心揺さぶられる可能性を見つけました。

3. 音楽で繋がり、心揺さぶられ、可能性を見つける

・三春町立三春小学校

まずは三春町立三春小学校の話です。三春町に震災3ヶ月後に日本フィルの弦楽四重奏メンバーが訪問しました。その時のことを三春小学校の遠藤校長（当時）は次のように語ってくれました。「三春小学校は富岡町、葛尾村から20名ほどの児童が避難していました。母校を離れ避難先の学校の校歌を歌わざるを得ない状況になっているので、それぞれの学校の校歌を演奏して欲しいと日本フィルに願い出ました。しかし、楽譜はありません。学校は帰還困難区域にあり立ち入りが制限されていて、学校から楽譜を持ち出すことは不可能



三春小学校

注2 【マイケル・スペンサー】元ロンドン交響楽団ヴァイオリン奏者で、2014年から日本フィルのコミュニケーション・ディレクターとして活動

に近かったのです。そんな中で「私、楽譜、取ってきます。」との声が上がリ私は一瞬耳を疑いました。

そしてコンサート当日、四校の児童・保護者・避難所の方々が集まり、初めて弦楽四重奏で校歌が流れました。子ども時代に歌った校歌に目頭を押さえるお年寄りの姿も。故郷を想い、友達を想い、懐かしさと寂しさが入り混じりながら、体育館に響き渡る澄んだ音色に私達の心は癒されました。子供たちを勇気付ける時、故郷に思いを馳せる時、いつもそこには音楽があったように感じます。不思議な力、心を穏やかにさせてくれる魔力が潜んでいると言っても過言ではありません。」

・南相馬市立原町第一中学校

次に南相馬市立原町第一中学校の話です。日本フィルは震災当初から南相馬市の避難所等で演奏を行ってきましたが、2年目から原町第一中学校吹奏楽部の指導を行うことになりました。それから13年の絆を作って熱心に指導された阿部先生の言葉です。「あの日を境にあらゆることが変わりました。半分以下に減った部員の切なる想いに心を動かされて部活動を再開しました。そんな私たちに日本フィルから演奏指導の話が舞い込みました。レッスンを受けて生き生きとしている生徒た

ちの姿を見ることができ、演奏は素晴らしく、心動かされ、楽しさのあまり、それまで張りつめていた色々な想いが急速に溶けていくのを感じました。これが日本フィルの「被災地に音楽を」との出会いでした。春夏秋と次々と手を差し伸べ寄り添ってくださいました。心が揺さぶられ、生徒の表情が変わり、エネルギーが満ち溢れてきているのを強く感じました。受身の生徒が多く、表現力が低下していると話をすると、マイケル・スペンサー氏（注2）のワークショップを展開し、ジョン・ケージ氏（注3）の偶然性の音楽手法で、音楽を作り上げたのです。子供たちがどんどん変わってきて、その可能性の大きさを感じることができました。震災で失ったものは沢山ありますが、私たちには音楽がありました。音楽で繋がり、音楽で心を揺さぶられ、音楽で意欲が充実し、音楽で子供たちの可能性の大きさを見つけました。」

4. 西洋と東洋のワークショップ

・クラシック音楽と地域伝統芸能のワークショップ

南相馬市の博物館を舞台に、国の重要無形民俗文化財である相馬野馬追に代表される日本の武士道と西洋の騎士道の代表としてリヒャルト・シュトラウス作曲のドン・キホーテを対比させる音楽創作ワークショップを行いました。（クラシック音



原町第一中学校

注3 【ジョン・ケージ】米国の作曲家（1912年～1992年）、演奏時間の中で演奏者が一切音を出さない「4分33秒」が有名な代表作

楽と地域伝統芸能のワークショップ) 大船渡市のリアスホールでは、地元の子供たちに受け継がれている郷土伝統芸能の平家の落ち武者の霊を鎮める「赤澤鎧剣舞」^{あかざわよろいけんばい}を踊る子供たちと、ハロウィーン我真夜中に死神が墓から死者を呼び出し朝まで賑やかに踊るというクラシック音楽、サン＝サーンス作曲の「死の舞踏」、これをワークショップで楽しみました。いずれも、日本の伝統芸能と西洋音楽作品に共通のエレメントを引っ張り出し、文化的に豊かな体験を作るというものです。

【新たな展開】

・「東北の夢プロジェクト」を創設

新たな展開として「東北の夢プロジェクト」を創設しました。打ち上げ花火のような華やかな活動ではなく、線香花火を楽しみ小さな火玉が消え去るまで見入るように「被災地に寄り添い、忘れない、今を伝える」ことを愚直に実践してきました。その間、被災地のニーズも大きく変化しました。震災直後からの地域住民の心のケアが圧倒的に大きなニーズであることは変わりませんが、他に文化芸術に触れる機会を増やしたい、地域内外との交流を活発にしたい、外部へ情報発信したい、人の集まる機会を増やしたいとの希求が年々強まってきました。そんな時に沿岸部または点とし

て行ってきた活動を、さらに面として発展させ、東北における文化レガシーとして活動展開できないかと、国から検討を要請されました。

それまでの小編成のアンサンブルを中心とした音楽活動に加え、フルオーケストラを中心に置いて、地域の文化と地元の大ホールで共演します。地域伝統芸能、学校文化（吹奏楽、管弦楽、合唱等）とクラシック音楽の共演です。沿岸部と内陸部、子供たちと高齢者これらを一堂に集め、子供たちの笑顔と頑張る姿で復興を後押しし、新しい文化活動を創造し、地域コミュニケーションの場を提供したいとの考えで「東北の夢プロジェクト」を作り活動に加えました。この「東北の夢プロジェクト」はコロナの影響で実施できない時期もありましたが、既に盛岡市で5回、郡山市で3回開催されています。盛岡市の公演では、学校の文化活動で宮古市の宮古高校吹奏楽部、北上市の黒沢尻北小学校の合唱部、滝沢市の滝沢中央小学校特設合唱部、そして沿岸部の久慈、宮古、釜石、高田の4校による繋がる絆合唱団が参加しました。郷土芸能の参加団体は大船渡市赤澤鎧剣舞、翌年に陸前高田市の気仙町けんか七夕太鼓、3年目は岩手県山田町の山田境田虎舞、4年目は久慈市の夏井大梵天神楽、そして今年は岩手県葛巻町の鶏舞が出演しました。また郡山市では、1年目に郡



南相馬市博物館

山市内の6学校合同による郡山合唱塾と南相馬市の原町第一中学校の管打アンサンブル、2年目にはFTVジュニアオーケストラと新地町の福田十二神楽、そして3年目の今年は田村市の船引中学校吹奏楽部、請戸の田植踊りが出演しました。

・「後藤新平賞」受賞

第4の柱の「被災地に音楽を」の活動は11年を経た2022年に第16回後藤新平賞（注4）受賞という栄誉をいただきました。「2011年に発生した東日本大震災後、日本フィルは心の復興を支援しようと震災発生直後から『被災地に音楽を』のプロジェクトにより、東北地方沿岸部の人々のために活動を継続してきた。特に楽団員と地元の青少年との交流は、若い世代の未来への希望を育み、11年間に300回を超え今後も継続されるという活動は、後藤新平の奉仕の精神と人材育成に対する高い志に通じるものである。」ということが、受賞理由です。これまで受賞された方は、李登輝さん、鈴木俊一さん、緒方貞子さん、安藤忠雄さん、石牟礼道子さん、福澤武さん、黒柳徹子さん等々で、団体として初めて受賞しました。100年先を見通しスケールの大きな政策、また人を育てながら地域や国家の発展に尽力された後藤新平氏の足跡のもと作られた志の高い賞をいただきました。大変

望外の喜びであり、地道に長年続けてきた被災地支援活動に光を当てていただいたことに感謝いっぱいでした。日が経つにつれ、その受賞の持つ意味の大きさと重さをひしひしと感じ、次へ決意を新たにしています。そしてまた、世の中で、この被災地活動は毎日新聞で取り上げてもらいました。記者が長期に亘って密着取材をして、被災地と一緒に回って書いていただきました。

第3部 音楽の力を次に

1. 地域とともに創る“協働”

“被災地に音楽を”の活動はこれまで見てきた地域のニーズの変化に合わせて、広域に県単位で東北の夢プロジェクトを生み出しました。この活動を3年、4年と続けている中で、また新しい課題に直面しました。社会全体の問題でもある人口減少、少子高齢化、文化格差、そして学校の統廃合により部活ができなくなるなどの問題が深刻化し、避けて通れないことを痛感致しました。地域に根付いた息の長い活動や復興のレガシーとするには、東京から音楽団体が来て演奏するということではなく、地域とともに創る地域との協働が必要であるとの結論に達しました。すなわち、行政並びに地域を担う関係者、報道機関、金融機関、



東北の夢プロジェクト（郡山市民文化センター）©菅野マコト

注4 【後藤新平賞】本賞では、日本の国内外を問わず、現代において、後藤新平（明治・大正期にかけて活躍した医師・政治家）のように文明のあり方そのものを思索し、それを新しく方向づける業績を挙げた方を、一年に一度選考し表彰します。

企業、芸術団体、これらと協働して、できれば地元実行委員会を作り企画、遂行する。音楽の力を次のステージへ上げなければならないと感じました。2023年5月岩手県の達増知事との間で文化芸術振興連携協定を結びました。そして2024年7月福島県の内堀知事と包括連携協定を締結しました。地域の様々な課題に迅速に、また的確に対応し、東日本大震災からの復興や文化振興、音楽教育の推進等を図ることを目的に加えて、福島県の魅力発信、地域の活性化への協力を要請されました。締結に至るまでの過程で内堀知事並びに県職員幹部の方々の復興に向けての熱い思い、並々ならぬ行動エネルギーに強く胸を打たれました。



福島県との包括連携協定

2. 交流と情報発信

具体的な活動、交流と情報発信です。包括連携協定締結後初の東北の夢プロジェクトが2024年8月に郡山で開催されました。第1部はオーケストラの演奏でホルストの“惑星から木星”他、第2部は上原彩子のピアノ演奏でガーシュインのラプソディ・イン・ブルー他、第3部は地元の子供たちのステージです。避難を強いられた中、伝統をつないで、今年再建された浪江町請戸くさのじんじやの茗野神社に奉納された請戸の田植踊りと田村市立船引中学校吹奏楽部、この2団体の素晴らしい演奏にホール全体が感動に包まれました。

福島県で今年度実施した事業、また実施する事

業について。地域復興支援活動と学校部活支援活動を分けてご説明します。

・地域復興支援活動

「地域復興支援活動」、双葉町のコミュニティへの協力、雇用創出により復興を支援するという社長の強い思いで建設された浅野燃糸スーパーゼロミルでのコンサートです。既に弦楽四重奏や木管五重奏での演奏会を開催、この12月には3回目のコンサートを城南信用金庫の「よい仕事おこしネットワーク」との連携で計画しています。南相馬市での復興支援の一つとして、南相馬市民文化会館「ゆめはっと」で施設と共催で行う有料のオーケストラ公演を開催しました。そして12月には、水素エネルギー開発を手掛ける企業「ミライト・ワン」と連携して室内楽コンサートを開催し、なみえ創生小中学校を招けないか検討中です。

・学校部活支援活動

「学校の部活支援」、10月に南相馬市立原町第一中学校の定期演奏会に日本フィルによる演奏指導と室内楽の提供を行いました。会津若松市では学校単位の吹奏楽が危機的な状況になっており、部活の仕組みがない学校もあり、指導者も不足しています。そんな状況に対して、福島県吹奏楽アカデミーI's、福島県と日本フィルが協働し、13の学校、58名の生徒達に楽器指導を実施。この活動を3年間続けて行こうと考えております。

もう一つ、もう一步進んで、震災15年目の年には、風化させない、他地域との交流を図るという目的で、子供たちの笑顔を東京へ招きたいと考えております。一つは東北の夢プロジェクトを東京で作り子供たちを呼ぶ、また、毎年開催している萩窪音楽祭に子供たちを招待します。次の一つは、東北の夢プロジェクトをアーカイブ化し、国内のみならず海外へも発信したいのです。地域伝統芸能、学校の持っている伝統文化、これを10年間蓄積したものは大変貴重なものになってしま

す。復興の努力、地域の持っている文化の素晴らしさ、音楽文化をハブに友好の輪を広げていきたいと思っています。もう一つ、できたらばと思っていますが、福島でクラシック音楽の定期演奏会を地域との協働で開催できないか、作れないかということです。夏は先ほど言いましたファミリー向けの東北の夢プロジェクトを毎年開催し、春は大人向けに本格的なクラシックコンサート、場合によってはこれをインバウンドの呼び込みにできないだろうかと思っています。そして年間を通じて浜通り、中通り、会津へ室内楽の演奏会を提供したいと考えています。

3. “音楽の力”の原点

心の復興を願う被災者支援活動が13年間の歳月を経る中で、地域の人々のニーズの変化に合わせて進化しています。長く続いた原点は何だったのでしょうか？被災地を訪問したクラリネット奏者の伊藤寛隆は次のように語っています。「生の演奏が一番強いメッセージになっていると信じています。ところが、実際は被災地で演奏してくると逆にこちらが勇気や力をもらいます。日本フィルの活動が続いたのは、現地の方々が大変なことがある中で、自分たちの生活以上に自分たちの町を明るくしていくためには、こういう活動が必要だからと受け入れてくれたからこそです。本当に感謝の気持ちしかありません。他の多くの楽団員も同じ気持ちです」これこそ、長く続けられたエネルギーだと確信しています。

もう一つ大切にしたい原点があります。コロナの発生時、文化団体の活動は4ヶ月間活動が制限

され、楽団存亡の危機を迎えました。社会の理解を求めましたが不要不急の文化に対する支援は不要との冷たい声が上がりました。文化活動のない乾ききった生活を強いられた後、4ヶ月後に演奏会を再開しました。演奏会が始まるとおいでになった多くの方々が号泣されていました。これは何だったのでしょうか。音楽団体にとって大事なメッセージをいただいたと思っています。前半で震災後2ヶ月の名取市の避難所での様子をお話しました。苦しい環境の中、多くの人在必死に耐えていた2ヶ月間。「演奏を聞いた途端、涙が出て止まらない、2ヶ月分の涙を流して良かった。お父さん私、もう少しこっちで頑張るね。」この話をする度に、ぐっときます。これが生の演奏、音楽の力の原点なのかと確信しております。福島県と包括連携協定を結んだ日本フィルは生の演奏、音楽の原点を大切に、音楽文化による復興の支援を地域とともに推進してまいりたいと思っています。言葉よりも強い力を持つ音楽の力を軸に活動の輪を広げ、復興の努力、地域文化の素晴らしさ、子供たちを含めた人々の魅力を見つけ出し、発信し、明るい未来を作る社会の選択肢となるよう御一緒に進めようではありませんか。



【おことわり】

本稿は、2024年10月4日に一般財団法人とうほう地域総合研究所、公益財団法人福島県産業振興センター、福島経済同友会の共催、株式会社東邦銀行の協賛、福島民報社、福島民友新聞社の後援により開催された「とうほう地域総合研究所 定期講演会」の要旨を当研究所の文責でまとめたものです。

新年あけましておめでとうございます。

日本フィルハーモニー交響乐团の方々は、「被災地に音楽を」をテーマに、東日本大震災直後の2011年4月6日の二本松市東和文化センターを第1回として、実に350回以上のコンサートを東北3県（福島、岩手、宮城）で開催されています。プロの迫力ある音楽は、時に我々を勇気づけ、寄り添い、心を癒していただいております。深く感謝申し上げます。

東日本大震災、福島第一原子力発電所事故から、まもなく14年を迎えることになります。この間の被災地の方々の並々ならぬご努力、不撓不屈の精神でその復興に尽力されてきた方々に心よりの敬意を申しあげます。



2024年11月15日 ホープツーリズム参加者
(出典：東京電力ホールディングス)

しを頂くとともに、引続きの変わらぬご支援を約束して下さいました。全国のたくさんの方々の想いや心が繋がり、響きあってこれからの「福島」を創造していくことが大切だと感じております。

浪江町に福島国際研究教育機構（F-REI）が設立され、各分野の専門家がまさに世界的レベルで招聘され、様々な叡智が当地福島に集結します。関係者の方々の努力に敬意を表するとともに心から感謝申し上げます。まさに、「おらがF-REI」「夢と希望を持った創造的復興」が展開されるように、私たち一人ひとりが自分事として関わっていく必要があると考えます。過日、F-REIのモデルの一つとされる沖縄科学技術大学院大学（OIST）の方々のお話を伺う機会をいただきました。2011年の設立以降、国を超えた最先端の卓越的研究を行っており、大学の全貌を理解するにつれ、感激し感動すら覚えました。F-REIという研究機関が当地福島に設立されたことは、福島の復興、発展に大きく寄与するものと確信しております。

混沌とした時代、先の見えない不透明な時代の処方箋は、地域に生きる人々の協働であり、全ての関係者の知見、想いの結集であると考えております。我々が、本当に見据えるべきは、5年後、10年後の「地域」であり、そこにおられる「人々の営み」です。

私どもとうほう地域総合研究所は、微力ながら、愚直に、真摯に、誠実に、地域の事業者の方々をご支援してまいります。

本年もどうぞ宜しく願い申し上げます。

(理事長 矢吹 光一)

私ども、とうほう地域総合研究所の「専門家プラットフォーム」は、弁護士、公認会計士、中小企業診断士、企業経営者等総勢30名を超える専門家集団ですが、その中で首都圏の専門家の方々を中心として、11月、12月の2回にわたり、被災地域、福島第一原子力発電所等を視察する「ホープツーリズム」を開催いたしました。参加者の方々からは、「福島の今を見て、何としても地域の力になりたい」「福島の出来事を風化させることなく、総合防災の先進地として全国に発信していきたい」「福島の子供達のためにできることは何でもやる」「福島から世界に飛躍しよう」などの力強いお言葉や励まし



2024年12月7日 ホープツーリズム参加者